

5 . 評価の実際と個に応じた指導事例

(1) 本時重点的に取り上げた評価規準

イ -

本文で学習した表現や構文を発展させてテーマに沿った英文を作ることができる。

(2) 評価の実際

評価の方法

机間指導 (グループ内での相互チェック)

- ・グループ内でお互いの英文をチェックし、表現がどのような内容で用いられているか、または、使われ方が適切かチェックする。
- ・全員が自分の作ってみた英文を声に出して読み、発表する。また、なぜその表現を用いたかをグループのメンバーに説明する。また、ストーリーのおもしろさにも注目させる。
- ・JTE はその場で出された語について質問やコメントを加えながら内容を評価する。
(予習プリントを活用する。)
- ・表現、構文の意味や用法を正しく理解しているかチェックする。
- ・意味を調べて記入されているかチェックする。

授業後の点検

- ・授業後、ノートを提出させ、点検する。文の内容の評価に加え、自分の考えや感想を記入させ、話を作る際の工夫、理解度を見る。また、「予習プリント」の記入状況も評価の対象にし、文は、できるだけ多く (5 文以上) 作らせる。

評価の決定

- ・基本的な文の構造が理解されていれば、 (B 以上) と判断する。

(例 1) 仮定法過去を用いた表現を使う場合。

If 節の中に過去形、帰結節中に助動詞の過去形が用いてあれば、 と判断する。

- ・ If he had ten thousand yen, I would buy this book.
- ・ If she were much taller, she would be basket player. (不適切なところがあるが)
- ・ If she were my daughter, she were a good assistant. ×

(例2) ダイアログを作るに当たって

本文に出てきた表現を用いてストーリーが出来ていれば、 と判断する。

- ・ If I were a little richer, I could buy this house. In terms of the price, this house is a very good deal. To judge from what the dealer says, the quality is the best. I will ask my father to help me pay it. But he is likely to refuse. In reality, he is stubborn.
- ・ If I were go to Tokyo, I went shopping to the supermarket. To judge from my father says, the quality of the things are better than those of Gifu.

× (文の数が少なく、文の構造もよく理解されていない。)

(3) 個に応じた指導の実際

個の学習状況に応じた手だて

- ・ 文の構造がよくわからない生徒に対して (今回の場合、不定詞とは何か、あるいは仮定法がどんな構造になるのかわからない) は、

不定詞と接続詞の区別ができない、つまり文の構造の基本が理解できていない生徒には、やさしい例文を豊富に示した。

上記例文を音声面を含めて声に出して言わせる指導を試みた。

- ・ 考えをうまく表現できない生徒に対しては、

やさしい短い英文で簡潔に表現させるようにし、徐々に長い英語で表現するように指導していった。

慣れてくるにしたがって、より多くの英文を作らせるようにした。

単元を通じた継続的な手だて

- ・ グループ内の発表では、文法や発音の点で自信のない生徒は、過度に意識し、黙りがちになる。最初は不完全でも、少し手助けをすることで、徐々に自信を付けさせ、劣等感を克服してやるのが肝心である。教師は机間指導をしながら、少しでも生徒の良い点を誉め、認めていくような指導を行っていく。

6. 評価から評定への総括

1. 評価

英語 において評価をしていくにあたって、次のような評価計画を立てた。

- ・補助簿の作成
- ・テスト作成
- ・ウエイトバランス表の作成

(1) 補助簿の作成

	具体的な評価の規準	評価の観点	Lesson 1	Lesson 2
関心・意欲・態度	言語活動への積極的な取り組みが できている。	グループ学習、ペア・ ワークの観察	B	A
	コミュニケーションを継続しよう とする意欲が見られる。	スキットの作成・発表 等の観察	A	A
表現	初歩的な英語で自分の考え、気持 ちを正しく書き表すことができる。	授業ノート・プリント のチェック	A	B
	既習の表現を用いて聞き手にわか るように話すことができる。	スキットの発表の観察	C	B
理解	正しく読みとることができる。	ノート点検によるチェ ック	A	A
	正しく聞き取ることができる。	活動の観察・机間巡視 など	A	B
知識 理解	異文化コミュニケーションの際の 注意点を理解している。	ノート・プリント等の チェック	A	A
	言語・言語の運用について基本的 な知識を身に付けている。	プリントを提出させて チェック	B	B

(2) テストの作成

ア 定期テストにおける評価の留意点

前期中間考査（リスニング・リーディング・ライティング・語彙の定着チェック）

前期期末テスト（リスニング・リーディング・ライティング・英作文等）

後期中間テスト（リスニング・リーディング・ライティング・内容把握等）

学年末テスト（リスニング・リーディング・ライティング・語彙の定着チェック）

各テストにおいては「表現」「理解」「知識」をバランス良く評価できる問題を熟慮して出題する。「表現」については下記のインタビューテスト、スキット発表などにおいても評価することを考えたい。

イ インタビューテスト

ALT を活用してインタビューテストを行う。内容は、なるべく本文の表現を用いた QUESTION AND ANSWER を中心に面接を行う。観点別に ABC で評価をする。

(3) ウェイトバランス表

観 点	評 価 方 法	配 分
関心・意欲・態度	授業による評価	1 0 %
表現	授業における評価 インタビューテスト 定期テスト	1 5 % 1 0 % 1 0 %
理解	授業における評価 定期テスト	1 5 % 1 5 %
知識・理解	授業における評価 定期テスト	1 0 % 1 5 %

〔留意点〕

定期テスト（インタビューテストを含む）5 0 %、授業の活動の評価5 0 %と、授業と定期テストの配分を同等にすることで、授業を重視させることを生徒に強調する。

・ 評定の算出

最後に評定を出して生徒・保護者に知らせる段階になる。上記のようにテストと授業のウェイトを半々にしたところでそれぞれの評価を点数化し、合計する。

A・・・3点 B・・・2点 C・・・1点とする。

定期テストの合計の満点を3 6 0点、インタビューテストの点数の満点の合計を4 0点とする。

(4回の定期テストの合計+インタビューテストの点数÷4 0 0×1 0 0・・・

評価点数の合計÷(評価の回数×3)×1 0 0・・・

と の平均で評定を付ける。

(換算表)

9 0以上・・・5 7 0～8 9・・・4 4 0～6 9・・・3
2 0～3 9・・・2 1 9以下・・・1

(例) 評価する項目が合計3 0になったとして、持ち点が6 5とする。

4回の定期テストの合計が3 6 0点、インタビューテストが3 2点とすると、この生徒の評定は、

(3 2 4 + 3 2) ÷ 4 0 0 × 1 0 0 = 8 9・・・

6 5 ÷ 9 0 × 1 0 0 = 7 2 . 2・・・ (四捨五入して7 2)

(+) ÷ 2 = 8 1 . 5 (四捨五入して8 2) よって、評定は4となる。